

米価暴落対策

岸田総理の「15万トンの特別枠」の効果は不明 共産党は「市場隔離」を訴え

米価暴落対策について、岸田総理が14日行った記者会見で、「15万トンの特別枠を設け、民間流通在庫の保管及び売買への支援を行うことで、当面、需給を安定化させます。」と述べました。

中食や外食などの飲食店向けの販売については、半額を国が助成することです。

得するのは全農と大手卸だけ

農水省は12日の自民党農林合同部会で、「15万トンの特別枠」新設を明らかにしました。

「分かり易く言ってしまうと、売れ残った2年産米を安値で販売するために、国がその経費を負担するだけの話で、得をするのは全農等と、2年産の周年対策で契約した大手卸だけ」

この特別枠対策の自身は、周年供給対策で保管対象数量になった令和2年産米37万トのうち、コロナによる需要減少分相当の15万トの保管料を国が全額負担すること、

「販売先支援として2分1を支援する中食・外食向けは、どこにも『国内限定』とは書かれていない。つまり海外の中食・外食業者に販売しても支援の対象になる」

さらに、子ども食堂など生活弱者に提供する場合は全額を助成すること、

「国内限定」とは書かれていない。つまり海外の中食・外食業者に販売しても支援の対象になる」

さらに、子ども食堂など生活弱者に提供する場合は全額を助成すること、

「販売先支援として2分1を支援する中食・外食向けは、どこにも『国内限定』とは書かれていない。つまり海外の中食・外食業者に販売しても支援の対象になる」

「販売先支援として2分1を支援する中食・外食向けは、どこにも『国内限定』とは書かれていない。つまり海外の中食・外食業者に販売しても支援の対象になる」



梅木たけし候補の第一声
（19日10時・鶴岡市役所前）

比例は日本共産党 3区は梅木たけし

梅木たけし候補の第一声（19日10時・鶴岡市役所前）

藤沢周平を読む⑩

鈴木重雄（八色木）

篠田病院から外泊許可をもらって帰郷したのは、再就職と家の借金問題もあったが、教職に戻っても生徒達と一緒に運動したり、学校行事をこなすことが出来るだろうか、内心危惧していた。

頼りにしていた中村作右衛門や高山正雄も高齢になり、昔日の勢いはなくなっていた。

周平は元の湯田川中学校の校長だった小杉先生を訪ねた。

先生は周平が入院している間に定年退職し、最近胃の手術をして自宅で静養していた。

周平はお見舞いがたら近況報告に立ち寄ったのだが、小杉先生は性急に周平の再就職のことについて触れてきた。

この狭い鶴岡で職を探すのは難しいのではないかと、「才能を生かすのは東京が一番だ」と言う。

そう言われたとき、周平は何の事を言っているのか分からなかった。

後で考えてみると、周平が教師時代につくった放送劇や寸劇などを指しているのだと分かった。

教師時代に文才を授業や教師生活の中に持ち込んだり、入院中に俳句や詩を作り、患者自治会の雑誌や新聞などに発表していたので、物書きには関心があった。

とにかく再就職は予

想以上の難しさに落胆して病院に戻った。するとそこに、湯田川中学校時代の同僚だった大井晴さんからのハガキで、「業界新聞でよければ働き口があるので紹介しても良い」と書いてあった。

大井さんは上京して就職し、優雅に同人雑誌に参加したりしていた。

周平は業界新聞がどういうものか見当もつかなかったが、働いて収入を得るのであれば、肉体労働であれ何でも辞さない程追い詰められていた。

しかし周平はその会社で1年半程しかいなかった。

月給が安く、経理に問題があるというのでがっかりしていた。

次はもっと悪い会社に移った。

経理は透明だったが月給は前より安く、編集長の名刺を持つ周平の下に1人の部員もいなかった。

事務所の2階で会議をしていると、隣の部屋からマジジャンパイをかき回す音が聞こえてくる。

しかし周平は一所懸命働いて、いつかは会社を大きくし、たっぷりと給料をもらおうと思っていた。

そういう雑然とした楽天的な気分であったようだ。

昭和34年8月、周平は三浦悦子と結婚した。

